エリクソンにおける女性性とジェンダー（1）

――「ケア care」概念をめぐる議論の予備的考察として――

須川　公央

はじめに

1975年の『タイム』誌（1975年3月17日号）に掲載されたある一編の記事を紹介することから始めたい。その名も「エリクソン再考 Erikson Revisited」と題された記事は，1970年代当時，アカデミズム内部において徐々に高まりつつあったエリクソンの著作に対する批判を受けて，次のような論評を寄せている。

「ここ数年，エリクソンは高まりつつある批判のターゲットになっている。学生たちは，エリクソンの語りの曖昧さや捉えどころのなさに不平を述べている。フェミニストは，彼が解剖学は運命であり，女性は女性以外の者になることは出来ないと主張した1963年の論文「女性と内的空間」を公然と非難している」。さらに記事は続けて，エリクソンを「現存する精神分析家の中でおそらく最も影響力のある人物」と評しつつも，彼は「まちがいなくフロイトの伝統が生んだ最も楽天的な思想家である」と，その評価はきわめて手厳しい［TIME，1975:48］。

事実，1970年代以降，エリクソンの理論は当時の時代状況に対してオプティミスティックかつ実証性に乏しい議論として，さまざまな批判にさらされるようになっていた。それは，彼のライフサイクル論はもとよりサイコヒストリーの手法，さらには独自の用語法にいたるまで多岐にわたっている。なかでも，1970年代におけるエリクソン批判の最大の論点は，彼の女性論に関するものであった。エリクソンは1964年に『ディダラス』誌上に，「内的空間と外的空間 Inner and Outer Space――女性性についての考察」という，女性性について初めて包括的に論じた一本の論文を発表する（これは後に，「女性と内的空間 Womanhood and the Inner Space」と改題されて『アイデンティティ――青年と危機』（1968）に収載される）。本論文において彼は，基本的にフロイトの理論を踏襲しながらも，男女の性差に関して独自の生物学的決定論とも受け取れるような議論を展開しているが，それが後に，一部のフェミニストたちによる仮借ない批判を招く結果となったのである。先の『タイム』誌に掲載された記事は，当時の論争におけるエリクソンの議論を要約して，以下のように説明，批判している。

エリクソンの1963年の論文[1]における説明は，全くもって明快ではない。彼は，生物学は運命であるといったようなことを述べているかのように思われる。彼は思春期の子供の遊びに関する臨床観察を再度取り上げて，男の子が高い塔を造るのに対して，女の子は多くの人間を囲った低い壁を築くという事実を観察している。これは女性が「内的空間 inner space」と養育に関する深い感覚を有しているということを示すものであり，部分的にそれは解剖学的な身体構造に由来するものであるとされる。少なくとも彼はそう考えているのである。

［ibid.48］

記事同様，多くのフェミニストたちにとっても，エリクソンの女性論は，男女の性差を「解剖学的宿命」と見なしたフロイトのそれと何ら変わらないものとして受容されたようである。たとえば，J・グリアは，世界的ベストセラーにもなった著書『去勢された女』（1970）において，「エリクソンは，女の肉体構造のなかに特定のスペースがある —— いうなれば，頭に空洞がある —— というとてつもない説を打ち立てて，子供を育てねばならないという女の使命感はその中で養われるのだと言った」[Greer, 1970=1976:120] と批判するが，実にこうした批判者の多くは，彼の理論がフロイト同様，旧態依然として生物学的な還元主義にとらわれており，現実社会における男女間の不平等を容認するものだとして数多くの辛辣なコメントを寄せたのであった。

確かに，エリクソンの論文を一読する限りでは，彼が男女の性差を強調するべく，女性の本質を身体の解剖学的な差異から基礎づけようとしているという印象はぬぐいきれない。それが結果として，女性の地位の現状維持を是認し，ひいては現行の家父長制を容認することにつながるとフェミニストたちが危惧するのはもっともなことである。しかしながら，こうした批判の多くは，エリクソンの議論をフロイトの女性論と同列にしか扱わないことによって，彼が本来意図しているところを捉え損なっているということもまた事実なのである。

そこで本稿では，当時の議論を振り返りつつ，あらためてエリクソンの女性論を再検討してみることにしたい。仮にその理論が生物学的な還元主義に彩られていたとしても，そこには何かしらフロイトの洞察を越えるものがあるに違いない。エリクソンは，フロイトの何を超克し，そして継承したのか。まずは，この点を明らかにすることによって，エリクソン理論の独自性を剔抉すること，これが本論文の最初の課題である。続いて，女性の性アイデンティティを規定するとされる二つの要因 —— 生物学的要因と文化的社会的要因 —— の対応関係を読み解くことで，エリクソンの議論に見られる本質主義的な傾向とその理論的陥穽を明らかにすることにしたい。そのうえで本稿は，さしあたり以上の観点からエリクソンの女性論を概括することで，近年，教育学（とりわけ女性の道徳性発達の問題と関連して）や倫理学を始めとする諸分野において盛んに議論されつつある「ケアcare」と女性性をめぐる問題に取り組むための理論的端緒を掴んでおくことを目的とするものである。

Ⅰ．エリクソンにおける女性性と内的空間

1．内的空間 Inner Space と外的空間 Outer Space

以下ではまず，エリクソンの女性論を概観することにしよう。論文「女性と内的空間」（1968）の冒頭部分において，エリクソンは，現実化しつつある核の脅威，無制限な科学技術の進展，さらには男性による社会の寡頭支配など，既存の男性中心的な社会のあり方を根本から問い直すべく，新しい時代というものが，女性の積極的な社会参画なくしては切り開けないとして，以下のように述べるところから議論を開始している。

核時代の特殊な危険のゆえに，男性のリーダーシップの適応力は，明らかに限界に来ている。支配的な男性的アイデンティティは，「有用性の原理」にもとづいており，それが建設に役立つのか破壊に役立つのかということには無関係なのである。……もしも，女性が，発展や歴史の過程でいつも私的に行ってきたこと（家事の現実，養育の責任，安寧維持のための機知，病人看護という献身的行為）を公的に表現しようという決意をしさえすれば，女性は，おそらく，広義の政治にたいして倫理的に抑制的な力を付与しうるであろう。なぜなら，そういう女性の行為は超国家的なものだからである。

[Erikson, 1968=1973:370]

こうした当時の時代状況に対する危機意識から，エリクソンは新しい時代のあり方を提言するにあたって，まずは「新しい人間像のもとに男女両性のアイデンティティを再定義する」[ibid.369] 必要性を説くが，彼が議論の中核に据えるのは，主として女性のアイデンティティに関するものである。エリクソンによれば，「今日において，女性の位置は，男性イメージが最高のものであるとする中にあって，漠然とぼかされて」おり，それゆえ「女性が人類の進化にユニークに参加し得るためには，世に貢献しうる独自性を同等にもち，戦い抜いて勝ちとるべき権利を行使する」必要がある [Erikson, 1964=1971:242]。

それは単に，男性社会にあって，男性と同等の権利主体として女性の男性化を推し進めるというよりはむしろ，女性の独自性，すなわち従来より女性に特有な資質と見なされてきたもの —— 例えば，出産・育児・家事労働など —— を男性原理に匹敵するほどにまで高めて，それを公的な場において打ち出していくということを意味している。

そうした観点から，ひとたび女性のアイデンティティを論じるにあたって，エリクソンは女性の身体的特徴から説き起こして，それを女性に固有の原理として打ち立てようと試みるのである。

ここでエリクソンは，11歳から13歳までの少年少女を対象にした遊びに関する自身の研究報告[2] について言及する。エリクソンの初期の研究の一つであるその論文は，両性の解剖学的な特徴が，遊びのなかにどのように反映されるのかについて観察，報告したものであるが，そこで彼は，被験者に机上のおもちゃを使って物語の場面をつくるという課題を与えた結果，男女においては，おもちゃの空間的な配置 configuration に違いが見られるとして，それを以下のように説明している。

まず，観察された少女の典型的な遊びの場面は，主に家屋の室内であり，壁のないものか，あっても一つの積み木でできた低いものであった。これら家屋の室内は，「壁で仕切られていようといまいと，たいていはことさらに平和的」であり，多くの場合，「動物や危険な男性が室内に侵入」しようとしていた。反対に，少年がつくった典型的な場面は，「精巧な壁で仕切られた家屋か，もしくは，突起したハザードのついている家屋」であり，「人間や動物は垣根や建物の外部」にいることが多かった。また，「精巧な自動車事故もあり，警官による交通整理」も見られた。これらの観察を総合するに，「男性的空間は，高さや瓦解，急速な動きや交通整理というものによって支配されており，女性的空間は，開いたままもしくは簡単な垣根をつけただけの，平和的で，すぐにでも侵入されやすいつくりの静態的な室内によって支配されていた」と言うのである [Erikson, 1968=1973: 382]。

こうした観察結果を受けて，エリクソンは，男女の遊びにみられる空間構成の違いを，男女両性の身体構造（機能）の現れであると結論づける。「少女は内的空間 inner space を強調し，少年は外的空間 outer space を強調」するが，それは直接に「肉体構造における男性原理と女性原理に対応」しているのだ [ibid.381f.]。

あそびの空間を組織化する際に見られる男女の性差は，生殖的分化の形態学そのものと平行しているように思われる。すなわち，男性においては，本質的に勃起的で侵入的な外部器官が，流動的な精液細胞の水路づけを行う。女性においては，玄関の通路のような内部器官が，静的に（妊娠を）待ち望んでいる卵子を生み出すのである。

[ibid.383]

このように，エリクソンは男女の遊びの場面に見られる空間様態 spatial modalities の違いを，それぞれ外的空間と内的空間として概念化

し，それをアナロジカルに男性器と女性器の機能的・構造的な違い —— エリクソンはこれを器官様式 organ modes と呼ぶ —— と結びつけて説明するが，彼によれば，男女の心理的な特徴もまた，性器の構造的な機能性という観点から演繹される。女性の心理に限って言えば，それは子宮が男性の精子を受容して子どもを産み育むように，「積極的に包容し，受容し，保有し，かつ死守し，抑制する能力」を有すると言うのである［ibid.402f.］。

エリクソンの「心理性的段階論 psychosexual stages」は，まさにそうした身体の器官様式と心理的発達のダイナミズムを描き出したものであるけれども，それがフロイトのリビドー発達論に多くを負っているということは，論を待たないであろう。そこで以下では，男女両性の定義に関するフロイト理論との異同を見ることで，エリクソンの議論の独自性を明らかにしていくことにしよう。

2．女性の生物学的本質への着眼とその称揚 —— フロイトを超えて

男女両性の定義をめぐるエリクソンとフロイトの違いは，フロイトが主として性器期の子どもを対象としていたのに対し，エリクソンは，それ以降の子どもをも直接観察の対象にしていたという点に発しているが，実はその点こそ，両者の女性性に関する見解を分かつ分水嶺ともなっている。

フロイトが女性の心理的特徴を，男根の欠如という観点から基礎づけたことはよく知られている。フロイトによれば，男児は，欲望の象徴である男根を母親に向けることで近親相姦的願望を達成しようと試みるが，それは直ちに父親からの去勢の脅かしによって断念させられる。エディプス・コンプレックスと呼ばれるこの一連の心理的プロセスは，男児が父親からの去勢威嚇を超自我として内在化することで一旦の収束を迎えることになる。

翻って，男根を所有しない女児は，そもそもの始めから，すでに去勢された存在として誕生してくる。したがって，父親からの去勢の脅かしを受けることがないため，エディプス・コンプレックスの継承者である「超自我も，われわれが男性に要求するほどには決して峻厳なものでも，非個性的なものでもなく，その情動的起源から独立したものではない」［Freud，1925=1969:169f.］。

かくして，両性の心理的な発達を発生論的に跡付ければ，「男性性は，主体，能動性，男根の所有という要因を総括したものであり，女性性は，客体と受動性という要因を継承するもの」［Freud，1923=1984:101］とされることになる。フロイトによれば，男女の発達を規定するのは，「唯一の性器，すなわち男性性器だけが役割を演じているのであって，性器優位ではなく，男根優位」［ibid.99］なのだ。

こうしたフロイトの理解に対して，エリクソンは「ここ（青年期から成熟期への移行の段階）において，人生初期に発達してきた性的差異や性向は，最終的に分極化する」［Erikson，1968=1973:375］としたうえで，男根の優位ではなく，性器の優位性を主張する。

「女性の精神分析に関する独創的な結論の大半は，いわゆる生殖的心理的外傷に，つまり，少女が自分は男根を持っていないし，また持つこともないということを突然さとるという事実に大きく依存」［ibid.388］しているが，「適応的観点からすれば，観察や感情移入というものは，急性的もしくは一時的な障害の時期を除いては，そこに存在しないものに対して排他的に焦点を合わせたりは」しない。「極端に都会的な状況におかれていない限り，女子は内的・肉体的空間 —— 危険でしかも生産的な潜在的可能性を秘めた空間 —— が，年長の少女や婦人や雌の動物のなかには存在しているのだということに気づくのである」［ibid.377］。

このように，エリクソンは，女性を男根の非所有者から女性器の所有者として新たに定義しなおすことで，男根の有無という価値基準によ

って規定されていた女性の地位を改変しようと試みる。それによって，自ずと女性の本質を説明する際の理論的な力点も，以下のように移行させることが可能であると言うのである。すなわち，

外部器官の喪失から活力的な内的潜在能力へと，母親にたいする憎悪に満ちた軽蔑から女性としての母親や他の女性との連帯へと，男性的活動を「受動的に」放棄することから，卵巣，子宮，膣の所有と調和した活動を目的的に追求することへと，そして，苦痛に対する被虐的喜びから，苦痛を人間的体験や女性の役割の有意義な一側面として堪え忍ぶ（そして理解する）能力へと。

[ibid.388f.]

女性の定義をめぐるエリクソンのこうした理論転回は，従来より精神分析学によって規定されてきた男女の非対称的な関係性を大きく覆す可能性を有していると言えるだろう。フロイトによれば，女性は男根の有無という男性中心的な尺度によって規定される存在であったが，それは，“男根を有する者”＝“男性”を両性間の基準とすることによって，女性はその基準との差異化によってしか定義されないということを意味している。

かつて，ボーヴォワールは『第二の性』(1949) の序文において，「男女両性の関係は二つの電極や磁極のようなものでは全くない。というのは，男は陽極と中性の両方の表象だからである。それは，人間一般を指すのにフランス語では“homme”という言葉がよく使われる事実に示されている。……女は陰極だけの表象であり，それは限定的な基準に定義づけられ，互換性を持たないのである」[Beauvoir, 1949=1997:10] と述べたが，それはそのままフロイトの議論にも当てはめて考えることができよう。フロイトにとって，男性と女性というカテゴリーは相互に入れ替え可能な互換的な関係にあるのではない。男根を有する男性は，男性であると同時に男女両性を規定する尺度そのものなのであって，それゆえ，男女の関係は常に非対称的なものにならざるを得ないのだ。

エリクソンが，女性の生物学的本質を称揚するのは，そうした男女の非対称的な関係性を対称かつ対等な関係性へと転換させるための方法論的戦略であったと考えることができる。女性を「男性なくしては個人として自分がいったい何者であるかも定義づけることが出来ない存在」[Friedan, 1963=1986:292] から，自らの属性を深く洞察することによって自己自身を定義できる者へと変えること。それによってエリクソンは，男女の新たな関係性の地平を描き出そうとしているのだと，さしあたりここでは理解することができよう。

Ⅱ．フェミニストたちによる批判とその応答

1．性アイデンティティの規定因をめぐって

女性を男性中心の一元的な価値基準によって規定するのではなく，女性固有の原理を新たに打ち立てることで，それを男性原理に対するアンチテーゼとして提示すること。男女の非対称性を解消するべく打ち出されたこの理論提起は，すべからく女性の本質を厳密に定義しなければならないという，エリクソン自身の方法論的態度にもつながっている。

先述したように，エリクソンは女性の本質を生物学的な次元から演繹して説明するが，それは女性の生物学的特質とそこから必然的に派生することになる性役割を，本質的に女性に固有なものとしてアプリケートすることにもなりかねない。エリクソンの議論に対する批判の多くは，女性の本質を生物学的次元から定義することが，女性の性役割の固定化，ひいては現行の家父長制を正当化する論拠として利用されかねないという事実にエリクソンが無自覚であったという点に集中している。

ラディカルフェミニズムの理論的旗手である

K・ミレットは，大著『性の政治学』（1970）において，性アイデンティティが生物学的要因のみならず文化的・社会的条件によっても規定されるという事実をエリクソンは看過しているとして，以下のように批判している。

各集団の特性は，文化的に条件付けられており，それら集団の政治的関係に依存しているのであって，このことは現代のもろもろの危機とは無関係に，歴史全体を通じて恒常的に見られるものであることを，エリクソンは認識していないのである。

［Millet，1970=1973:365］

なかでもミレットが批判の矛先として挙げるのは，エリクソンが自らの理論の根拠として引き合いに出した子どもの遊びに関する研究である。ミレットは，被験者が10代の思春期の子どもであったことからして，男女の遊びに見られる空間構成の違いは，解剖学的な差異の現れであるというよりはむしろ，社会的・文化的に期待されている性役割を被験者たちが学習した結果ではないかと指摘する。ミレットによれば，エリクソンは性アイデンティティの形成を専ら生物学的な「性 sex」という観点からしか説明しないが，それと等しく文化的・社会的文脈おいて学習された性役割もまた，重要な構成要件の一つであるという事実をエリクソンは見過ごしている。「精神分析は学習された行動を生物学と取りちがえるという誤りを一貫しておかしつづけているが，エリクソンの全理論はこの誤りの上に構築されているのだ。」［ibid.372］。

確かに，ミレットが指摘するように，遊びの空間様態に関する研究が，純粋に身体の解剖学的構造を反映したものであるかどうかは疑問の余地が残るものの[3]，エリクソンが性アイデンティティの構成要件に文化的・社会的要素を含めなかったというのは，いささか乱暴に過ぎる批判と言わざるを得ない。エリクソンはフロイトの“解剖学は運命である”という言葉を引きつつ，自ら「私は「解剖学は運命である」と主張しているのであろうか」［Erikson，1968=1973:402］と自問している。そこで彼は，個人の性アイデンティティが，身体の解剖学のみならず，歴史を通じて一般化された性に関する社会的，文化的通念の影響も受けるとして，以下のように述べている。

これまで，わたしは，生理学的な真理をくり返し主張してきたに過ぎない。生理学的な真理は，否定してもいけなければ，また，排他的に重視しすぎてもいけない。…… 歴史とは運命であるというナポレオンの格言も，また，フロイトがそれに対立させて主張した —— とわたしは信じているのだが —— 運命は解剖組織にその原因があるという格言も，ともに正当なものである。…… 換言するならば，解剖組織，歴史，パーソナリティの三者が合体したものが，われわれの運命なのである。

［ibid.403f.］

もとよりエリクソンは，遊びの空間構成においても，社会的要因が影響している可能性を否定してはいなかった。「社会的な解釈によれば，少年は屋外が好きで少女は屋内が好きなだけであり，もしくはせいぜいのところ，少女は，家屋という屋内で，家族や子どもに静かな女性的な愛情を捧げることが自分の役割であると認め，少年は，冒険という大いなる屋外で男性的な大望を抱くことが自分の役割であると認めているに過ぎないのだという」が，いずれにせよ「解剖学的な解釈も社会的な解釈も，両方の可能性が否定されない限り，ともに正しい」のである［ibid.384f.］。

このようにエリクソンは，歴史的社会的要因が性アイデンティティの形成になにかしらの影響を与えるという可能性を否定しないが，ここで一つ問題として生じてくるのは，性アイデンティティの構成要件に歴史的社会的要因を含めることが，女性のアイデンティティの定立とい

う当初の企図，それ自体の理論的前提を崩しかねないという事実である。

先述したように，エリクソンは，女性固有の原理を打ち立てるべく，解剖学にその根拠を求めることで男女の差異を基礎づけようと試みるが，性アイデンティティが，歴史的・社会的要因によっても決定されるという以上，解剖学は男女の差異を基礎づける唯一の根拠とはなり得ない。したがって，解剖学的特徴から説き起こして新たに女性固有の原理を打ち立てるという目論見は，ここにおいて脆くも崩れさってしまいかねないことになる。

では実際に，エリクソンの議論は破綻していると考えるべきなのだろうか。以下，エリクソンが定義する歴史的・社会的要因と生物学的要因の錯綜した対応関係を読み解くことで，この疑問を解き明かしていくことにしよう。

2．エリクソン理論における本質主義的傾向とその陥穽

論文「女性と内的空間」（1968）に対するフェミニストたちからの批判に応えるべくして発表された「内的空間を再論する Once more the Inner Space」（1975）というエッセイにおいて，エリクソンは，フェミニストたちによる批判の論点を整理しつつ，自らある架空の質問を立てて，次のように自問自答している。

あなた（エリクソン）は，「女性のコミットメントや参加行動の基本様式は，当然のことではあるが，女性の肉体の基本計画もまた反映しているのであって，それゆえ，解剖学と歴史とパーソナリティの三者が合体したものが運命なのである」と述べているが，フェミニストたちは，解剖学が文化的条件を決定するという限り，解剖学のみが運命ということになるのではないかと批判している。ケイト・ミレットは「精神分析は学習された行動を生物学と取りちがえるという誤りを一貫しておかしつづけているが，エリクソンの全理論はこの誤りの上に構築されているのだ」と批判しているが，あなたはこの批判に対してどう答えるのか？

[Erikson, 1975:228]

ここでエリクソンは，上記のミレットの批判に対しては，性アイデンティティが解剖学，歴史，パーソナリティの３つの要因によって重層的に決定されるという従来の主張を繰り返し述べるだけで，それ以上，立ち入った回答はしてはいない。しかしながらここで重要なのは，フェミニストたちの批判として挙げられている「解剖学が文化的条件を決定するという限り，解剖学のみが運命である Anatomy is only destiny insofar as it determines cultural conditioning.」という一文である。これに対してエリクソンは，「解剖学はある程度，文化的条件を決定するのだ」[ibid.228] と反論するが，そもそも，この「解剖学が文化的条件を決定する」とはいったい何を意味するのだろうか。

まず，エリクソンによれば，「肉体構造における男性原理と女性原理は，文化的な時間・空間における性役割の画定ということに生涯関連しているのだ」[Erikson, 1968=1973:386] とあるように，その時々の歴史や文化における性に関する社会的な通念 —— 例えば，男女の「性役割 gender role」に関する社会的通念など —— は，身体の解剖学的な属性が持つ意味を少なからず反映しているとされる。

一般に，社会的・文化的な意味形成物であるとされる性別役割分業や通文化的に見られる女性らしさや男性らしさの観念といったものは，およそ身体の生物学的基盤と無関係に成立しているわけではない。それらは，解剖学という生物学的な与件を土台にして構築されると言うのである。先の「解剖学はある程度，文化的条件を決定するのだ」という主張は，さしあたり以上のように理解して良い。

しかしながらここで注意しておきたいのは，こうした生物学的基盤が，いかなる厳密な意味

においても，文化的・社会的な性のあり様 —— いわゆるジェンダー —— を「決定」するわけではないということである。批判者の一人であるE・ジェインウェイは，エリクソンの女性論を評して，生物学的決定論であると断じているが［Janeway，1971=1976］，もし仮に，生物学的な基盤が，文化的・社会的諸条件を「決定」すると言うのであれば，エリクソンが掲げる女性の地位向上や女性による社会変革はとうてい為し得ないことになる。というのも，文化的・社会的諸条件が生物学によって予め決定されるということは，生物学は運命であると主張しているようなものであって，そこには女性の主体的な活動や変革の余地は残されないからである。

先に，エリクソンが「解剖組織，歴史，パーソナリティの三者が合体したものが運命である」と言い，「解剖学が文化的条件を決定するという限り，解剖学のみが運命である」という批判に対して，「解剖学はある程度，文化的条件を決定する」と述べたのは，自ら生物学的決定論の立場を回避することで，女性の主体性が発揮されるための理論的根拠を担保するためであったと考えることできる。

では，解剖学的特徴から説き起こして新たに女性固有の原理を打ち立てるという主張は，どう理解すればよいのだろうか。

エリクソンによれば，「人間の身体の基本計画 ground planの体験という点では，男女両性の間には巨大な差異が存在する」としつつも，それは「男女ともある固有の（解剖学的な）空間様態に運命づけられているなどということ」を意味するわけではない。「模倣的もしくは競争的ではない文脈においては，これらの様態は，ある自然な理由 —— これこそ我々の関心の的だが —— に基づいて「もっと自然にやってくる」」と言うのである［Erikson，1968=1973:386］。

性アイデンティティは，身体の基本計画の影響を受けはするものの，それを始めとする様々な条件によって決定されるがゆえに，解剖学は性アイデンティティのあり様を運命づけているわけではない。エリクソンはこの命題を逆手に取って，社会的・文化的要因といった条件が関与しない，あるいはそれら条件が解除される限りにおいて，個人は真の意味で自らの生物学的属性を発揮することができると言うのである。それは次の一文からも明らかであろう。

わたしの主要な論点は，さまざまな制限が解かれたとき，女性は，生物学的・解剖学的に所与のものの意味をはぐくむことができるのだということである。

［ibid.413］

今日の社会における女性の役割葛藤や男女間の社会的不平等といった事態は，男性中心主義に基づく偏った社会のあり方や制度に起因している。エリクソンによれば，そうした社会や制度のあり方こそが，女性の生物学的属性の発現を真の意味で妨げ，制限していると考えるのである。したがって，女性が自らの生物学的属性を真に発揮するためには，男性中心の社会や制度のあり方こそがまず問われねばならない。

エリクソンが唱える女性固有の原理とは，そうした男性中心主義的なバイアスを是正し，補完するための対抗原理なのであって，それをより強固な理論的背景によって基礎づけるために，女性の解剖学的属性をいわば本質化することで，その問題を克服しようとしたのだと考えることが出来よう。その限りで，女性固有の原理とは，言うなれば，その時々の社会や文化，歴史に拘束されない一種の純粋な理念型とでも言うべきものであるが，我々はエリクソンの理論を以上のように理解した途端に，また新たな問題に直面してしまうことになる。

これまで繰り返し述べてきたように，エリクソンは，性アイデンティティが，身体の解剖組織，歴史，パーソナリティの3つの要因によって重層的に決定されると述べ，そうした事実を前提としたうえで，女性のアイデンティティを

厳密に定義するために，唯一，解剖学にその論拠を求めていた。

そこで，解剖学に由来する女性固有の原理が意味するものとは，歴史的要因を始めとする文化的・社会的な条件の影響を排した一種の理念とされるわけだが，問題は，エリクソンが女性固有の属性として具体的に示した当のもの――例えば，「家事の現実，養育の責任，安寧維持のための機知，病人介護という献身的行為」[ibid.370] など――が，はたして，純粋に女性の解剖学的属性から導き出されたものなのか，あるいは男性中心主義的なイデオロギーに基づく文化的・社会的所産なのかということが明らかにされていない点にある。

結論から言えば，エリクソンは文化的・社会的条件の影響を免れた理念としての女性原理を提唱するにあたり，それを文化的・社会的条件の影響を少なからず受けているはずであろう現実の女性の社会的属性から説明するという誤謬を犯してしまっている。

無論，こうした批判に対しては，エリクソンは「文化的条件が，解剖学によってある程度決定される」と言っているのだから，そうした女性の社会的属性は，すでに解剖学的属性が持つ意味を反映している以上，論理的に言って問題はないのではないか，という反論も成り立つかもしれない。

しかし，仮にそうした反論を考慮に入れたとしても，我々は，いまだ払拭されずに残されている問題点を，以下のように指摘することは可能であろう。

すなわち，エリクソンの言う女性原理が，これまで通り，家事や育児といった社会的役割を女性固有の属性として称揚するものだとすれば，それは女性の性役割を固定化することで，逆説的にも，従来の家父長制という社会システムそのものを正当化してしまうことになりかねないということである。

実際こうした問題は，エリクソンのみならず本質主義的な性差観一般に見られるものであるが，次稿では，こうした本質主義的な傾向のうちに潜む理論的諸問題をより広い文脈に位置づけて吟味するべく，エリクソン理論の批判的継承者であるC・ギリガンの議論と併せて考察することで，女性の道徳性発達と「ケアの倫理 ethic of care」をめぐる本質主義的な問題とその超克の可能性について検討することにしたい。

（つづく）

【註】

1）実際に，「内的空間と外的空間」論文が発表されたのは1964年のことである。ここで1963年とされているのは，前年に開催されたアメリカ芸術科学アカデミー主催のシンポジウムにおける発表原稿を指しているか誤植かのどちらかであると思われる。なお，本論では，「内的空間と外的空間」論文の引用に関しては，『アイデンティティ ―― 青年と危機』(1968) 所収の改訂論文「女性と内的空間」を用いることにする。

2）この研究報告の詳細に関しては，Erikson (1951) を参照されたい。

3）因みに，このエリクソンの遊びの空間構成における実験結果は，その後，行われた幾つかの追試実験によって反駁されているということを付記しておきたい［cf. Caplan,P.J. (1979) およびBudd,B.E. (et al.) (1985)］。

【参照文献】

Beauvoir,S.D. (1949). S・D・ボーヴォワール（井上たか子ほか監訳）『第二の性（Ⅰ）：事実と神話』新潮社，1997年。

Budd,B.E. (et al.) (1985). 'Spatial Configurations : Erikson Reexamined' *Sex Roles,* 12 (5).

Caplan,P.J. (1979). 'Erikson's Concept of Inner Space : A Data-Based Reevaluation.' *American Journal of Orthopsychiatry,* 49, January.

Erikson,E.H. (1951). 'Sex Differences in the Play Configurations of Preadolescents.' *American Journal of Orthopsychiatry,* 21, October.

―― (1964). E・H・エリクソン（鑪幹八郎訳）『洞察と責任：精神分析の臨床と倫理』誠信書房，1971年。

―― (1968). E・H・エリクソン（岩瀬庸理訳）「女性と内的空間」『アイデンティティ：青年と危機』金沢文庫，1973年。

——（1975）. 'Once More the Inner Space.' *Life History and the Historical Moment*. New York : W·W·Norton & Company.Inc.

Freud,S.（1923）. S・フロイト（吾郷晋浩訳）「幼児期の性器体制」『フロイト著作集 第11巻』人文書院，1984年。

——（1925）. S・フロイト（懸田克躬ほか訳）「解剖学的な性の差別の心的帰結の2，3について」『フロイト著作集 第5巻』人文書院，1969年。

Friedan,B.（1963）. B・フリーダン（三浦冨美子訳）『新しい女性の創造（増補版）』大和書房，1986年。

Greer,G.（1970）. G・グリア（日向あき子ほか訳）『去勢された女（上）』ダイヤモンド現代選書，1976年。

Janeway,E.（1971）. E・ジェインウェイ（内野久美子ほか訳）『男世界と女の神話』三一書房，1976年。

Millet,K.（1970）. K·ミレット（藤枝澪子ほか訳）『性の政治学』ドメス出版，1985年。

TIME.（1975）. 'Erikson Revisited' *TIME*, March 17, Asia. ed.